

2023年度学校評価 改善の方策(2024年度に向けて)

評価の観点	評価項目	達成状況	本年度の取り組みと改善の方策	学校関係者評価 コメント
① 基礎基本	わかる喜びのある授業づくり	C	今年度も『『読み取る力』をつける』ことに重点を置いて研修を重ねた。「読みの視点」を明確化することにより、教師も児童も意欲的かつ分かりやすい授業展開ができるようになってきている。さらに、読み取ったことを基に、自分の考えをもつ段階の次にはペアで考えを交流する、ノートを見て回る、タブレットを利用するなど、様々な方法を用いて自分の考えを伝えることができ、伝え合う喜びを味わう授業へと展開することができた。しかし、「読みの視点」をどの授業においても明確にすることが難しく、単発的になっていたり、子どもの実態に即していない状況も見受けられる。そのため、来年度以降の研修のあり方を、子どもを主体として考え、方向性を考え直していきたいと考える。	まずは児童向け・保護者向けの学校評価は、ほとんどの項目で高得点であるのがよい。学校の取り組みが認められていると言うことでだと考える。しかし、先生自身の評価は点数が低い結果となっている。子どもの実態に即していないと書いてあるのが気になった。元気もりもり学習大作戦と名付けた強化週間を設け、保護者とタイアップしながら啓発を行っているのはすばらしい。連携して取り組んでいくことが大切であるし、保護者に学校のことを知ってもらえるよい企画である。学習に集中させるために、持ち物にまで配慮し、筆箱の中身を写真提示することにより、視覚的にとらえ、家庭と持ち物の共通理解をはかっているのもよい。多可町の子は読み取る力が弱いと言うことで、朝学習での読解力トレーニングの試みは面白い。また、読書アプリ活用というのも子ども達の意欲を高めるという取り組みで興味深い。昔とは違ったやり方で、興味深く子ども達が学習に取り組めるのはいい。いろんな取り組みに時間がかかり時間のやりくりが大変だと思うが、余裕を持って取り組めるようにしてあげて欲しい。
	個に応じたきめ細かな指導		支援の必要な児童に対して、兵庫型システム、加配教員、学習支援委員、スクールアシスタントがかかわり、学力の向上に努めている。中・低学年では、「がんばりタイム」で個別の支援が必要な児童に計算(当該学年や前学年の学習内容も含め)などを反復練習させ基礎学力の定着を図っている。	
	家庭学習への取り組み		今年度は、4回の家庭学習強化週間を設け、家庭学習の定着を目指した。また、前回のふり返りをもとに、目標時間の達成率や保護者からの声、今回に向けてのお願いなどを掲載した「元気もりもり通信」を発行して啓発に努めた。家庭学習時間のめやすの達成率は一年間の平均で80%を越えたが、「自分から進んでできた」かどうかに着目させたり、筆箱の中身の写真で示した掲示物を各児童に配布したりし、さらに家庭学習習慣への指導を続けている。	
	朝の学習への取組		読解力トレーニングでは、低学年ではプリント、中・高学年ではタブレット端末で文章を配布する形で進め、つまずかず読む→速く読む→5W1Hが分かる→話の大体が分かる→感想(考え)がもてるということをめあてに児童のスキルアップを図った。その際、簡単な文章から始めたり、ゲーム性を取り入れたり、楽しんで活動できるようにした。Motto Sokkaという読書アプリを活用し、子ども新聞を読む学年もあった。しかしながら、今年度も、2学期以降は運動会や朝マラソンなどの行事が重なることが多く、年間を通して継続して行うことができない学級が複数あった。また、文字を読むことへの抵抗が大きい児童が学級の中には複数名おり、全員が楽しく継続して取り組むことが難しい。研修の方向性ととともに、朝学習についても児童の実態に即したものに変わっていきたい。	
② 道徳教育 人権教育	規範意識や道徳的判断力を高める授業	B	日頃から教師として人権意識を高くもち、教育活動にあたった。特に、児童のことは「さん」付けで呼ぶこと、授業の中では標準語で話すことを意識した。道徳指導においては、年度当初に中町スタンダードの共通理解を図り、どの教師がどの教室で授業を行っても、同じ流れで授業を進められるようにした。引き続き、講師を招聘しての授業づくりの研修をしていく。	児童を男女関係なく「さん」で呼ぶことに違和感がある。男女それぞれの「らしさ」もあるとかんがえる。授業の中で教師が標準語を使うことを目指している中で、播州弁を使うこともあってもいいのでは。人間的な暖かみを感じられ、親近感がわく。しかし、標準語を使った優しい対話の中で、トラブルが減ったと言うことには驚いた。言葉の大切さを感じる。にこにご集会などの人権感覚を育む活動は大切で、子どもの環境を整えることで、お互いを尊重する文化も育っていく。最近の世相から、性の不一致の問題のことが話題に上がった。本人たちは学校でそのことに気づくことが多く、教師たちの看取りが大切であるという話であった。十分な知識を身につける必要がある。
	自己を高め、友だちを思いやる心や態度の育成		にこにご集会の作品作りを通して友だちや周囲の人々を大切にしようとする心を育てたい。児童の言葉で人権課題を伝え、他者への思いやりの気持ちを語らせることは理解しやすく心に響くと思われる。今後も継続して全校挙げて取り組みたい。	
	道徳の教科としての評価		年度当初に評価の方法について共通理解を図った。そのため、1、2学期の評価については、発言や態度、道徳ノートへの記述などから根拠を明らかにして懇談会で話すことができている。3学期には年間を通じた道徳の時間の取組の様子と、学びの姿を伝えていく。	
③ 特活 学校行事	いじめを許さない学級作り	B	毎学期「いじめ」の授業に取り組んだ。学年に合わせて、いじめの理解やいじめの四層構造について学習を進めた。また、月1回の学校相談シートや学期1回の面談を行うことで、風通しの良い学級作りに取り組んだ。また、オープンスクール等でいじめの授業や心の授業を取り入れ、子どもたちだけでなく、保護者にも理解を深める機会を設けた。今後も、継続して行う。	児童は相談シートに本当の悩みを書いているのか疑問であったが、書いている子に聞き取りと対応を繰り返すことで、児童たちも安心して本音を書けるようになる。昔は学校便りにいじめの件数等が書いてあったが、今はない。件数を書くよりも、学校での取り組みを知らせる方がよいと考えてのこと。いじめに対してどう取り組んでいるかを知らせることで、家庭と連携しながら子どもを見守って欲しい。心の健康教育等保護者にも興味を持たれている方も多い。児童たちが自分自身について知るいい機会であると思う。
	児童の主体性を重視した活動の充実		6年生を中心に、1年生仲間入り集会、異学年交流遊び、6年生企画の縦割り交流(フェスティバル)を行った。特に、縦割り遊びやフェスティバルは、全校生が楽しめる時間になったことや高学年としての自覚が育つ良い機会になった。今後は時間の取り方を改善し、児童に負担のない時間で行いたい。	
④ 特別支援教育	特別支援教育に係る研修の充実と共通理解	B	本年度も難聴児に対する理解を深める研修と、SCによる「発達検査の活用」と「感覚統合について」の研修を行った。通常学級に在籍する支援を要する児童については職員間の中で共通理解を図り、個に応じた手立てとよりよい支援の方法について学ぶことができるような校内研修を行いたい。	支援を要する児童は増えている。個に応じた支援を要するが、学校では特別支援学校やSC等専門的な知識を持っておられる方々に児童の様子を見てもらい、特性について知るとともに、どのような関わりを持ったらいいいのか確認し、職員で共有することで対応力を付けていることである。また、サポートファイルを利用し、縦の連携を図ることで個に応じた支援を行っている。とてもきめ細やかな対応をいただいている。連携を大切に指導の充実を図っていただきたい。
	一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援		サポートファイルをもっている児童や各学級で課題のある児童については、効果的な支援方法やサポートファイル作成の指導助言を受けた。必要に応じて専門機関やスクールカウンセラー、アイ・あいスクール等につなぎ、よりよい支援をすることができるようにしている。今後も個に応じた支援ができるようサポートファイルや支援計画・指導計画の見直しをしながら支援を続けていきたいと考える。	
⑤ 安全・防災 健康・食育	生命を守る安全教育の推進	B	登校指導と下校指導を実施した。課題があれば、その都度、地区担当教師や関係の担任教師が連携して、児童に安全な登下校について指導することができた。交通安全教室では、警察の方にも来ていただき、1、2年生は歩行訓練、3、4年生は自転車訓練を行い、安全な歩行の仕方や自転車の安全な乗り方を学ぶことができた。5、6年生については、ヘルメットの着用などについてもう一段階踏み込んだ指導の時間を設けるようにしたい。	登下校では、人数が減り集団での登下校が成り立たなくなる地域が出てきている。男女一緒に登下校したり、雨の日は保護者が送迎する地区もある。本校では以前から見守り隊を結成し、無理のないかたちで登下校を見守る素地がある。ただ、委員の年齢が高齢化しつつあり、委員の若返りが求められる。また、保護者の自主的な見守りも日常的に行われている。仕事前や通勤途上など保護者が様子を電話等で連絡してくることもある。地域で学校をサポートしていくことが自然にできおり、いいことである。避難訓練では取り組みを工夫し、児童の判断力の育成に尽力しておられて素晴らしい。
	実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進		今年度も年3回(不審者対応、火災、地震)の避難訓練と1月の防災学習(事前指導+キッズ防災検定を含む)を行った。チャイムが連続で3回なれば不審者侵入の合図であることや、緊急地震速報を知らせる音が複数あること、緊急時の避難の仕方等を確認することができた。来年度はより実践的な態度を育てるために、避難訓練を休み時間に実施したり、不審者対応ではバリエーションの作り方や教職員の研修を行ったりするようにしたい。	

⑤ 安全・防災 健康・食育	健康に関心を 持ち、体力向 上に取り組む 児童の育成	B	家庭学習チェックと合わせて、「元気もりもり学習大作戦」として「早ね・早起き・朝ごはん」に取り組んだ。早ねにおいては、学年が上がるにつれて目標時間が遅くなっており、23時以降の児童も数名いる。健康な生活を送るために自ら意識して行動できるよう指導や啓発をを継続していく。水泳、運動会、なわとび運動など季節に合わせた体力作りを全校でそろえて計画し、学校全体で統一して取り組んでいく。また、サーキットトレーニングや体ほぐし運動など授業の始めに短時間で行えるものを継続して取り組んでいくことを提案したい。	元気もりもり大作戦はわかりやすくてよい。家庭と連携した生活習慣づくりを進めていてよい。マラソン大会の距離が短く、中学校との差がありすぎるとの指摘。しかし、北播磨駅伝も同等の1.6kmであり小学生には適切な距離であるとのこと。走ることを好きにする指導ということである。スポーツテストの結果を踏まえ、体育の時間にサーキットトレーニング等体力作りを工夫していくことが大切である。食育指導では栄養教諭による授業や皮むき体験などの活動を通して食への関心が高まっている。家庭と連携しながら食習慣について考える素地を育てたい。
	望ましい食習慣の育成		今年度は新型コロナウイルス感染症も5類となり、栄養教諭による指導と動画配信とを交えて食に関する指導を行った。給食センターの見学や野菜の皮むき体験などを通し、食への興味や感謝の思いが深まった。給食では、食事のマナーや好き嫌いせず食べることを、各クラス複数の教師で指導している。家庭とも連携しながら、来年度も継続していく。	
⑥ 生徒指導	挨拶、掃除等の基本的な生活習慣の確立	C	生活指導委員会と児童会・代表委員会が連携して生活のめあてを設定した。月に1度の朝会で生活指導担当から全体指導をし、そして各担任が学級指導を行い定着できるように連携して指導を行った。昨年度から、代表委員会の組織を児童会だけでなく各委員会の部長も委員として編成した。今年度は5年生の委員会代表も5年生代表として編成したことで、高学年が中心となり、学校生活の課題を見つけ解決に向けて取り組む具体策を話し合うことができた。また、児童会役員選挙をする際に、5年生代表として代表委員会に参加していた児童から立候補する児童が多かったことは成果だといえる。掃除では、児童の人数が減少していたり、教師の目の行き届きにくかったりするため、分担区を厳選する必要がある。さらに、月に一度縦割り班掃除などを取り入れ、普段の掃除以外をまかなうなど工夫が必要な時期にきている。	保護者より茶髪やパーマの児童を見かけたが、どう指導しているのかという質問があった。学校としてもあまりよいとは考えていない。ただ、頭髮に関する校則はなく、強制的に変えさせることはできない。校長からは保護者に向け、中学校の校則を踏まえ、入学に向けて身だしなみを整えることを啓発するメールやお便りを出す予定。子どもの権利条約等、権利を守ることや自主性を重んじていく事が求められている。
	子どもと向き合い、子ども理解を深める生徒指導の徹底		毎月末に「生活のふりかえり」としてアンケートを実施した。また、各学級担任には毎学期担任している児童との面談を実施し、相談したり、話したりする時間を設定し、児童の声を聞ける機会をもうけた。個人面談は、相談がなかったとしても教師と児童が個人的に話せたという経験が心の安定につながるので継続していく。	いじめに対する取り組みの中で、相談シートには児童が本音を書いてくるのかと言う質問があった。やはり悩んだ子は書いてくるし、聞き取りを行い、事実確認をしたうえで、指導を入れている。この取り組みを続ける中で、いじめについて訴え、いじめをなくすという意識を高めるとともに、判断力を育てていってほしい。
	不登校ゼロ、いじめゼロの実現		いじめゼロを目指し、毎学期いじめの授業、面談、月1回の学校相談シートを活用して情報収集に取り組んだ。それをもとに、いじめ対策委員会を月1回開き、職員間の共通理解を図ってきた。校務支援に児童の行動記録や問題行動を入力し、学校全体で把握できるように努めた。また、トラブルがあった時は、臨時でのいじめ対策委員会を開き早急に対応した。	また、教室に入らないなどの問題行動については保護者との面談も行いながら取り組み、現在は教室を出ている児童もいなくなっている。先生方の地道な取り組みが功を奏している。
⑦ 教職員の 資質向上	教育の専門家としての資質・指導の向上を図る校内研修の充実	B	今年度も国語の研究授業の事後研修会で、グループ討議の後に全体討議の時間を設定した。昨年度に引き続いて同じ講師を招聘したことで、研修に一貫性と厚みのある積み上げができた。また、今年度は学級経営案をどの学級も作成し、それを基に学級経営に取り組んだ。学期ごとに学年団で振り返りを行うことで、さらにより良い学級を作るための手立てを話し合うことができた。さらに、夏期休業中には、働き方改革研修を行い、業務改善の仕方や定時退勤を行うためにどんなことができるか意見を出し合った。教師自身がゆとりをもって働けるよう、出来ることから取り組んでいる最中である。	児童の特性に対応したり、一人一人の力に応じた効率のよい学習のために、教員の資質向上が求められている。学習端末の配備を完了し、授業での効果的な活用により学びを充実させることが必要である。児童の学習環境がめまぐるしく変化しているなか、昔と比べて先生方に求められることは多岐にわたり、研修をもって理解を深めようとしていることに感謝している。また、担任一人で問題に対応するのではなく、学年団や学校外の専門機関などと連携しながらチームで対応しておられることはとてもよいと感じた。そうやって学校の対応力を高めると共に、その経験を通して、職員の指導力が高まるのだと感じた。
	教師としての使命感や子どもに対する愛情、責任感		課題をもつ児童に関しては、いじめ対策委員会だけでなく、職員会議でも共通理解する場をとっている。担任だけにとどまらず、多くの職員が支援に関わる体制をとることで、児童理解や支援の方法が深まるよう努めている。また、児童理解に関しての知識を深めるために、今年度はスクールカウンセラーによる校内研修を2回行った。	
⑧ 組織運営	教育目標達成に向けた、それぞれの校務分掌における意欲的な取組	B	学校教育目標「いのちと人権を大切にし、共に学び高め合う、こころ豊かな中南っ子の育成」を目指し、各担当で責任を持ち、校務の遂行に努めている。また、学級担任を中心に、いじめや問題行動等について丁寧な対応に心がけていた。	校務支援システムの活用が進んできている。児童のトラブル等の周知を図ることが効率的になっていることはとてもよい。いじめや不登校に対していち早く情報を確認しながら対応して欲しい。児童が居心地のいい学習環境や人間関係を作って欲しい。
	学校の経営方針の浸透、報告・連絡・相談の徹底と情報の共有化		組織として、学校の経営方針に基づいて、各教職員は業務に取り組んだ。校務支援システムを有効活用し、『報連相』の徹底に努めた。	働き方改革は社会全体の課題である。特に教員はブラックだと言われている。なり手も少なくなっていると聞く。このままではいけない。先生方の勤務時間の適正化が進んでいることはとてもよい。ストレスをためずにしっかりリフレッシュできる場面をもって欲しい。
	勤務時間の適正化		定時退勤日の取組は、昨年度に比べて大きく改善している。また、年間勤務時間外時数もほとんどの教員が、昨年度より減少している。ここ3年間で一番、改善が見られた年であった。今後も夏季休業中に、働き方改革研修会を開催し、勤務時間の適正化に取り組んでいきたい。	
⑨ 施設・設備	学習・生活の場として適正な施設・設備等の管理・整備	B	本年度はプール水泳の学習を行うことができた。教科学習の時数の関係もあり、10日程度で行った。温暖化による暑さのため、地区水泳は行わなかった。今後できないと考える。プール水泳実施には経費がかかり、学校のプールを使わずに町営のプールを使うという選択肢もある。ただ、本校としては移動に時間がかかり、効率的でないという観点から今後も自校のプールを使う予定である。整備が必要である。	プールに関しては、修理費や運営費に毎年多額の費用が必要となっている。また、田植えの時期にプール清掃の排水が田に流れ込み、稲の生育に影響を与える子とも考えられる。学校としては来年度から多可町立温水プールを使用する予定であると聞いた。児童が減っていく中でこれまでは違った適切な運営を考えていくことが必要である。
	整理整頓された学びの場にふさわしい環境づくり		壁掛けモニターのない教室がある。プロジェクターよりも鮮明に見ることができうえ、操作もしやすいため、モニター設置を推し進めたい。7月の落雷により、エアコンやWiFi等不具合が続出した。なんとか夏休み中に修理し使用することができたのは幸いであった。トイレの戸がないトイレがあり、冬場には凍てつくことがあり、防寒対策が必要である。	トイレの凍結に関して、凍結しそうな日の前には教頭がトイレの入り口を板などでふさいでいる現状がある。是非改善を行って欲しい。
⑩ 家庭・地域との連携	家庭や地域への情報発信と情報収集	B	感染症対策では郡内の状況を鑑みながら教育委員会と情報交換し、週明けに混乱が少ないよう予防や混乱防止に努めた。また、不審者情報に関しても関係機関と連携し、早めに手を打つことができた。本年度からテトルを使ってメール配信を行っている。欠席連絡もスムーズとなり、児童の健康状態をスピーディーに把握できることで対応しやすくなっている。今後は保護者へのプリントの配布を一定程度テトルに切り替えたり、ORコードを使ってアンケートをするなどして、効率化を図っていきたい。	那可ふれあい館がアンケートをWEBでおこないたいと希望している。保護者や児童もできる体制にあるので行ってほしい。学校ではテトルの導入により欠席の把握が効率的になり、対応も素早くできるようになった。ICTの利用により効率化を図ることが進んでいる。
	保護者や地域の人々と連携した教育活動の推進		コロナ禍ではPTA活動は縮小したが、児童中心の学校活動を見直す良い機会となった。また、オープンスクールでは地域の人と連携した教育活動もできるようになってきた。図書ボランティアになってくださる方があった。今後は環境整備や教育活動などに関するボランティアを増やしていくことが課題である。学校運営協議会委員会でも諮りながら協議をしていく。	本年度は図書ボランティアが増え、図書館の整備に尽力いただいている。今後は授業のお手伝いや清掃などボランティアを呼びかけてほしい。保護者や地域の方に積極的に学校に来ていただき、学校運営に関わっていただくことが必要である。